

戊辰戦争・灰爪の戦い

平成2年「おらが町学級」資料 荒木家光氏・遺稿より

北越戊辰戦争西軍、東軍激戦地の遺骨発掘控え

○昭和52年6月12日、午後5時30分トマト畑より発見

場所 畑所有者 池田基市

耕作者 荒木家光

発見者 荒木ハナイ

夕刻、西山町役場住民課へ連絡。

別山駐在へも連絡し指示を受け翌日、早朝、正法寺住職により現地にて読経。

13日、柏崎警察署課鑑識課長以下3名、別山駐在、役場角田課長、伊佐教育委員会主事、和田又治文化財審議委員長並びに地主関係者の協力にて発掘する。

○北枕に浅いところ20cmに、両手を胸に合わせ合掌し、古銭4枚（皇宗通宝）中国銭600年前の銭、と共に、発掘。数日後、新聞報道により、新潟大学・小片教授の要請により、新潟大学へ持参する。

○昭和53年6月1日、昨年の発掘位置より南へ2mで1体発見。

○昭和53年6月2日、西山町大字灰爪向平669番地、荒木家光所有畑よりまた1体発見。役場住民課、別山駐在へ連絡し、6月8日午前発掘。各関係者立会の元に、遺骨は、No.1同様に北枕にて胸に手を合わせ、No.2は頭の下に永楽銭6枚有り。No.3は埋設状態同様なれど古銭なし。

○発掘日時は、新大・小片教授に連絡。新大の要請により同日午後、伊佐、徳永主事、荒木氏3人にて白骨No.2, No.3を個別に持参する。小片教授は一見して、どうもこの仏は女性らしいと言われ、一問、一答の後、白骨の年代が600年前か、又は100年前か調査を依頼して帰る。その後、小片教授の鑑定書の来るのを心待ちにしておりましたが、昭和55年小片教授が急死したのでそのままになる。

○昭和53年12月1日、水戸市市史編纂室石川係長を訪問して、発掘の現況をお話として、供養と墓印の件を依頼する。

○注、No.1発見後、長岡市の稻川さんと水戸市との連絡により、灰爪激戦地の水戸藩史料により、戦死者名簿を受領する。

○東軍水戸諸生党、市川三左衛門、佐藤図書の配下140人が灰爪村の向山に5月12日陣を構え、西軍の北上を阻止すべく奮闘中、別山村の庄屋の手配が坂田村西軍本陣円満寺へ通報し是により、西軍14日辰の刻（5時）、長州一個小隊、加州・水野徳三郎一個小隊が大砲一門にて田沢村、尾野内村より大砲2弾連発の攻撃を受け、また、歩兵隊の猛攻を受け、戦死者50数名を残し、出雲崎の本隊へ合流すべく石地駅方面へ散走した。

○西軍灰爪攻撃の案内役は、椎谷藩の佐藤喜佐エ門であると加州藩の報告書にある。

○思うに、発掘されし4体の人骨は、激戦前に亡くなり、味方（東軍）が埋めたものと思われる。新潟大学・小片教授にも人骨の埋めてあった深さ、方角、状態等を進言する。

○尚、50人位の戦死者は、「塚」に埋めたもの火葬にしたものと聞いている。

○註、慶応4年5月14日は、今の歴に直すと、7月3日で、当時は田植えの最中で雨降りの状況にあった。

供養塔設立までの道

親達より明治維新の際、会津戦争と言って大勢の武士が戦い沢山の人が亡くなった。そして、「埋まっている所はこのあたり」とこの塚のことは聞いていましたが、百年もたった

今（昭和 52 年 6 月 12 日及び翌年 6 月 1 日、2 日）、4 体の白骨が立派な保存の状態で出てくるとは予想もしませんでした。発見後、町役場、警察と各所皆様の協力にて発掘し、柏崎警察署鑑識課でも、是は事件に関係ないと言われ、新潟大学・小片教授の要請により新大へ持参致しました。

先生は、人骨の世界的権威者であり、先生に年代の早期鑑定をご依頼致しました

その後、各方面より資料が寄せられ、加州藩の戦闘報告書、水戸藩史により灰爪の戦没者も五十有余名と解り、別山村の古者の伝承などで、慶応 4 年 5 月 12 日、東軍「水戸藩諸生党・市川三左衛門の配下・150 名」が、灰爪に陣地を構え、西軍を迎撃つための準備をしていた所、5 月 14 日早朝、西軍長州一ヶ小隊、加州一ヶ小隊の大砲一門の攻撃を受けました。（案内役は椎谷藩の佐藤喜左エ門と解りました）

西軍の攻撃は大砲を連発し、歩兵部隊の進攻がいかに激戦であったか東軍の戦死者があまりにも多いことでもわかり、ただ驚くばかりです。

その後、戦没者供養等いろいろ皆様と話し合い、又、水戸市役所の石川係長とも話し合い、お願ひもしてきましたが、諸般の事情から意のままにならず、頼りにしておりました新大の小片教授が急死され、鑑定書も出ず、月日がたつばかりでした。

平成元年に至り、戦いの場となった地主関係者が発起人となり、町内外の有志の皆様の物心両面の御協力により、ここに、供養塔を建設して、本日開眼供養ができるはこびとなりましたことは、諸先輩の皆様の絶大なる御援助の賜物と深く感謝し、厚く御礼を申し上げる次第であります。

尚、詳しくは灰爪の戊辰戦争をお読みくだされば幸いです。

平成元年 10 月 12 日
発起人代表 荒木家光

戊辰の役・灰爪の戦いについての考察

この考察は水戸藩士の名誉の為に書き残すものです。

昭和 52 年 6 月 12 日以来、4 体の白骨が戦いの場となった付近から出土し、埋蔵文化財として新潟大学に大切に保管されてあります。私は発見当初より、仏の供養と供養塔の建立を願ってきた者ですが、平成元年 10 月 12 日、念願の供養塔の開眼供養も町内外の多数の皆様の御協力によって無事成就しました。この戦いで多数の戦死者の出た状況については遂に解明されずじまいでしたが、平成元年 10 月上旬になり、西軍の連発した砲弾の一発が上山田村の一本松に当たって落下し、他の一発は上山田村の田の中に埋もれていることを古者言で確認しました。平成 2 年に至り、この戦い当時、別山村某家に、水戸藩士が多数宿泊していて、その時使った火縄銃、槍等が同家に保管されていることも判りました。戦い当日、即ち、慶応 4 年 5 月 14 日の天候は、金沢加州藩の古文や薬師峠を死守した会津藩井上哲作の報告書、また、別山村の古者の伝承等にも「昨夜来の冷雨」とあるように、雨降りでした。その為、東軍は、主力火器である火縄銃が使えず、西軍が使用した単発撃発銃の猛射の前に、予想外の戦死者を出したものと思われます。戦場となった畠は、120 年前の戦争当時には、現在のように柿の木等は無く、50 cm 程に成長した一面の広い麦畠であったことから、後退の際には西軍火器のよい目標になって、更に、戦死者の数が増したのではないかと思われます。

致命的な悪条件の中で東軍将士が如何に勇敢に戦ったかを書き残し、供養の一助になればと、今日まで調査し、聞いたことを記して終わりとします。合掌

荒木家光
平成 2 年 3 月 20 日